

『就実論叢』第46号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2017年2月28日 発行

小学校家庭科教科書の食物領域の学習内容についての考察
平成17年度、平成24年度、平成28年度用教科書に
掲載されている用語の比較分析を通して

**Food Sector Terminology in Home Economics Primary School Textbooks:
A Comparative Analysis of Terms Published in the Years 2005, 2012, and 2016**

畦 五 月

小学校家庭科教科書の食物領域の学習内容についての考察 平成17年度、平成24年度、平成28年度用教科書に 掲載されている用語の比較分析を通して

Food Sector Terminology in Home Economics Primary School Textbooks:
A Comparative Analysis of Terms Published in the Years 2005, 2012, and 2016

畦 五 月 (生活実践科学科)
UNE Satsuki

キーワード：小学校家庭科、教科書、食物領域、用語分析

要約

1. 小学校旧学習指導要領家庭では、「複数の内容の関連をはかる」との記述がみられたが、小学校新学習指導要領家庭では、その記述は消え、教科書の単元は領域毎に内容が構成された。
2. 最新教科書では、「言語活動の充実」に該当する「家庭科でよく使われる用語（索引に該当）」が設定され、様々な用語に対する理解を深める試みを導入している。
3. 最新教科書の食物分野のページ数が最も増えている理由として、学習内容のみならず調理実習の題材増加も挙げられる。

1. はじめに

学校教育のあり方を提言した平成8（1996）年の中央教育審議会の答申¹⁾での「[[ゆとり]の中でみずから学び自ら考えるなどの[生きる力]の育成を基本内容とする」との文言を受け、平成10（1998）年に告示された小学校学習指導要領において家庭科もその内容が改訂された。従来の「A 被服」「B 食物」「C 家庭の生活と住居」の三領域であった内容を、内容の関連性を図りながら柔軟に題材構成を行うという観点から再編がなされた。すなわち、「家庭生活と家族」「衣服への関心」「生活に役立つ物の製作」「食事への関心」「簡単な調理」「住まい方への関心」「物や金銭の使い方と買い物」「家庭生活の工夫」の8つの内容に整理統合して題材を構成し、複数の内容の関連をはかった²⁾特徴があった。その再編において、削除された内容及び、中学校へ移行統合する内容もみられた²⁾。さらに、各学校や児童の実態に応じた弾力的な指導をしやすくするために、内容を2学年まとめて示すようになった²⁾。

平成20（2008）年に告示された現行の学習指導要領において家庭科は、上述の8内容から

4 内容に再編統合された。すなわち「A 家庭生活と家族」「B 日常の食事と調理の基礎」「C 快適な衣服と住まい」「D 身近な消費生活と環境」の4 内容である。この改訂にあたっては、中学校技術・家庭科の内容との系統性や連続性を重視し、生涯にわたる家庭生活の基礎となる能力と実践的な態度の育成の面から内容統合がされた³⁾。さらにこの改訂は、平成20年の中央教育審議会の答申⁴⁾ 内容を基に推進されている。この答申内容は家庭科の目標に、「家庭生活を大切にすゝる心情をはぐくみ」「生活をよりよくしようとする実践的な態度」「基礎的・基本的な知識及び技能」という文言で盛り込まれた。21世紀は知的基盤社会の時代といわれ、豊かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことが重要になるとされていることが改訂の背景にある³⁾。小学校家庭科でも平成20年の中央教育審議会の答申を受けて、他の教科との連携を図り、社会において子どもたちが自立的に生きる基礎を培うことを特に重視しており、この内容に沿った学習指導要領の内容構成がされた³⁾ といえる。

小学校家庭科の内容変遷の研究はいくつかの先行研究がある。たとえば田部井⁵⁾ は、小学校家庭科教科書における食物領域の内容を昭和36年から昭和55年にかけて分析している。また、今井⁶⁾ は昭和36年から平成12年までの小学校家庭科教科書の各分野の占めるページ数とその割合から食物領域の割合の増加を指摘し、さらに、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領に示された調理に関する学習目標と調理題材の変遷について河村⁷⁾ は示し、高木⁸⁾ は小学校家庭科の教科書の内容構成を調理実習と製作実習題材の変遷を通して研究している。しかしながら、平成10年と平成20年の学習指導要領に準拠した同一出版社での小学校家庭科教科書における食物領域の内容研究は管見の限り見られない。そこで、本研究では食物領域の内容が学習指導要領の変遷に伴いどのように変化したのかをたどることで今後の内容構成を検討する一助とすることを目的とした。

2. 方法

調査対象教科書

平成20年に告示された学習指導要領（以下新指導要領）に準拠し、平成28年に発行されている小学校家庭科の教科書は三書籍である。このうち本研究では、A社の平成26年に検定を受け平成28年に印刷・発行された平成28年度用「小学校5・6 わたしたちの家庭科」⁹⁾ を最新教科書として使用した。対して、平成22年に検定を受け、平成24年に印刷・発行された平成24年度用「小学校5・6 わたしたちの家庭科」¹⁰⁾ を新教科書とした。さらに、平成10年に告示された学習指導要領（以下では旧指導要領と略記）に準拠し、平成16年に検定を受け、平成17年に印刷・発行された平成17年度用「小学校5・6 わたしたちの家庭科」¹¹⁾ を旧教科書として使用した。

(1) 学習内容の分類と構成

調査対象とした三種から食物領域の目次、あるいは二種の教科書（最新・新教科書）から

一口メモに使用されている用語、食物領域の調理実習題材名を抜き出し、新教育課程と旧教育課程における学習内容の比較を行った。この一口メモは旧教科書には設定されていない。

(2) 分類に使用した教材内容

①新旧指導要領から食物領域の内容を、加えて最新・新・旧教科書から目次を抜き出し、新課程と旧課程における学習内容の比較を行った。

②最新教科書の索引に該当する「家庭科でよく使われる用語」から食物領域に関する用語を抽出し、内容から六分類した。ただし旧教科書と新教科書には索引に該当するページはなかった。索引は、教科書の主旨が最も反映され、かつ限られたスペースに厳選した用語を提示してある用語録であるので調査に利用した。

③小学校・中学校・高等学校を通して、実践的・体験的な学習活動を重要視している教科が家庭科である。その代表的といえる活動が、調理実習及び製作実習である。そこで、本研究では、三種の教科書掲載の調理実習題材を主材料別に分類し比較した。

3. 結果及び考察

1. 新旧学習指導要領及び三種の教科書における食物領域の指導内容

(1) 新旧学習指導要領における食物領域の指導項目の比較

小学校旧指導要領家庭の内容構成は8つであったのに対して、同新指導要領家庭ではAからDの4つの内容に減少し、この内容は中学校家庭科の同容との系統性や連続性を重視した内容構成³⁾であった。つまりこのAからDの4つの内容は中学校家庭科の内容とほぼ同じである。中学校での学習内容を見通して、小学校の学習に求められる基礎的・基本的な知識や技能、生活をよりよくしようと工夫する能力と実践的な態度が着実にはぐまれることを目指して同じ内容で設定された³⁾。表1には、指導要領の改訂に伴う食物領域の指導事項の移行を示した。

旧指導要領に比較して新指導要領では内容構成の変更が見てとれ、同時に事項数が増加して、より学習内容が詳細に記載されている特徴がある。その一例として、調理過程（操作）が旧指導要領では2つの事項（(5)イとオ）に含まれていたが、新指導要領では「(3)イ材料

表1 新旧指導要領における食物領域の指導項目の比較

旧指導要領	新指導要領
	B. 日常の食事と調理の基礎
(4) 食事への関心	(1) 食事の役割
ア 食品の栄養的特徴と食品の組み合わせ	ア 食事の役割と日常の食事の大切さ
イ 1食分の食事	イ 楽しく食事をするための工夫
(5) 簡単な調理	(2) 栄養を考えた食事
ア 調理計画	ア 体に必要な栄養素の種類と働き
イ 洗いや、切り方、味の付け方、後かた付け	イ 食品の栄養的特徴と組み合わせ
ウ ゆでたり、いためたりする調理	ウ 1食分の献立
エ 米飯及びみそ汁の調理	(3) 調理の基礎
オ 盛り付けや配膳、楽しい食事	ア 調理への関心と調理計画
カ 用具や食器の安全で衛生的な取り扱い、こんろの安全な取り扱い	イ 材料の洗いや、切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片付け
	ウ ゆでたり、いためたりする調理
	エ 米飯及びみそ汁の調理
	オ 用具や食器の安全で衛生的な取り扱い、こんろの安全な取り扱い

下線は、旧および新指導要領にない箇所を示す。

の洗い方、切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片づけ」の1つの事項に統合され、学習者にとって調理過程が連続した一連の操作となり把握しやすい構成に改善されている。

新指導要領で増加した事項もあり、これらは「(1)イ楽しく食事をするための工夫」と「(2)イ体に必要な栄養素の種類と働き」「(3)ア調理への関心」である。これらが新規に指導事項に入ることにより、「(1)食事の役割」や「(2)栄養を考えた食事」の学習内容はより系統的に習得できる構成となった。

新指導要領の「(2)ア体に必要な栄養素の種類と働き」の学習内容である「五大栄養素の働き」は、旧指導要領ではその学習内容にはない。旧指導要領ではこの学習内容は中学校へ移行させる²⁾と記されているが、新指導要領では小学校での学習内容に復活し、「五大栄養素の働き」の基礎的事項を指導するように明示してある¹²⁾。

(2) 三種の教科書における食物領域の目次の比較

学習内容からみた各教科書の目次の推移を表2に列記した。調査対象とする教科書は、旧指導要領に準拠した教科書一種(1冊)¹¹⁾、新指導要領に準拠した教科書の二種(2冊)^{9, 10)}の計三種(3冊)である。

表2 新旧指導要領に準拠した小学校家庭科教科書の目次の比較

旧教科書	新教科書	最新教科書
身回りをみつめてみよう 生活を見つめ、できることを増やしていこう		
2. わたしにできることをやってみよう(4ページ)	2. はじめてみようクッキング(10ページ)	2. はじめてみようクッキング(10ページ)
① 簡単な調理をしてみよう	① クッキング はじめの第一歩	① クッキングはじめての一歩
② 身の回りを整理・整としてみよう	② ゆでてみよう	② ゆでてみよう
③ 針と糸を使ってみよう	③ ゆで野菜サラダをつくろう	③ 野菜をゆでておいしく食べよう
★チャレンジコーナー		
作ってみよう、調べてみよう		
2. 作っておいしく食べよう(8ページ)	7. 元気な毎日と食べ物(10ページ)	7. 食べて元気に(10ページ)
① ごはんとみそしるを作ってみよう	① どんな食品をたべているだろう	① なぜ食べるのか考えよう
② どんなものを食べているだろう	② 五大栄養素のはたらきと食品のグループ	② 五大栄養素のはたらき
③ バランスのよい食事をしよう	③ バランスのよい食事をしよう	③ 3つの食品のグループとその働き
★チャレンジコーナー	④ ご飯やみそ汁をつくろう	④ ご飯とみそ汁をつくろう
計画的に生活しよう 工夫して、生活にいかそう		
1. 生活を見直そう(6ページ)	1. くふうしよう 朝の生活(8ページ)	2. いためてつくろう朝食のおかず(5ページ)
① 朝の生活を見直そう	① 生活時間を見直そう	① 朝食を考えよう
② 生活時間を工夫しよう	② 共に過ごす時間をつくろう	② いためてみよう
③ 朝食に合うおかずを作ろう	③ 朝食を考えよう	
生活に生かそう		
2. 楽しい食事を工夫しよう(6ページ)	5. くふうしよう 楽しい食事(7ページ)	6. くふうしよう おいしい食事(7ページ)
① 1食分の食事について考えよう	① バランスのよいこんだてを考えよう	① バランスのよいこんだてを考えよう
② 調理の計画を立てて作ろう	② 身近な食品でおかずを作ろう	② 身近な食品でおかずをつくろう
③ 家族と楽しく食事をしよう	③ 家族と楽しく食事をしよう	③ 楽しく、おいしい食事をくふうしよう
★チャレンジコーナー		
総ページ数 24ページ	25ページ	32ページ
旧教科書では食物分野のページ数のみを示した。		太線: 新規増加内容
太字は食物領域以外の単元内容を示す。		

三種の教科書では、新指導要領の改訂を受けて単元構成が大きく変化した。例えば大単元は旧教科書の4つ(「身の回りをみつめてみよう」「作ってみよう調べてみよう」「計画的に生活しよう」「生活にいかそう」)から、新教科書と最新教科書では「生活を見つめ、できることを増やしていこう」「工夫して、生活にいかそう」の2つに変更された。

次に最新教科書の目次は、新教科書の目次を概ね踏襲しているが、一部細分化や統合化がされている。つまり一部の教科書の単元内容は、最新教科書では単元をまたいでいくつかの単元で指導するように変更された。たとえば、旧教科書からほぼその単元内容が移行していた新教科書の「1. くふうしよう 朝の生活 ③朝食を考えよう」は、最新教科書では「7. 食べて元気に ①なぜ食べるのか」「2. いためて作ろう 朝食のおかず ①朝食を考えよう」と「2. 同 ②いためてみよう」に移動している。この理由は、旧教科書が旧指導要領に述べられている「複数の内容の関連をはかる」²⁾ という文言に沿った内容構成になっていたため、新教科書もその内容構成を踏襲していたためである。しかしながら最新教科書では[B]の食物領域のみの内容構成に変わったため、その学習内容を複数の単元に分け、栄養素と食品の組み合わせから調理へと結び付けてより系統的発展的な学習が可能ないように変更したと推察される。

一方、旧教科書と新教科書には、食物領域とそれ以外の領域で構成されている単元が1つないし2つみられる。つまり1つの単元が、食物領域と食物領域以外の被服あるいは家族分野とで構成されている例である。たとえば、旧教科書の「2. わたしにできることをやってみよう」の単元は、食物領域の「①簡単な調理をしてみよう」、被服領域の「②身の回りの整理・整頓をしてみよう」と「③針と糸をつかってみよう」の二領域にまたがり構成されている。他にも旧教科書の「1. 生活を見直そう」では、食物領域の「③朝食に合うおかずをつくろう」とともに、家族領域の「①朝の生活を見てみよう」と「②生活時間を工夫しよう」の単元も入り、複数領域で単元が構成されている特徴がみられる。

以上述べた領域が混合した単元例は、新教科書から徐々に改善され、最終的に最新教科書では食物領域単独の単元となった。つまり、旧教科書及び新教科書でみられた領域をまたいだ単元の学習内容は、それぞれの領域の内容に移行され、単元内容は領域別に整理・統合された。これを説明する例として旧教科書「1. 生活を見直そう」の「①朝の生活を見てみよう」と「②生活時間を工夫しよう」は、最新教科書では[A]の内容に完全に移行している。つまり、最新教科書では別々の領域の学習内容を同じ単元で横断的に扱うことはなく、最新教科書の「2. いためてつくろう 朝食のおかず」の単元は、「①朝食を考えよう」「②いためてみよう」の2つの単元からなる食物領域単独の学習内容に再構成されたことになった。

前述の(1)指導要領の指導項目でも触れたように、新指導要領では「五大栄養素の種類と働き」が学習内容として復活している。指導要領の学習内容変更を受けて新教科書と最新教科書においては、順に「7. ②五大栄養素の働きと食品のグループ」あるいは、「7. ②五大栄養素の働き」の単元としてその内容が網羅された。この内容が新たに加わることで、最新教科書の「7. 食べて元気に」の単元は、食事を栄養素と食品の組み合わせの両観点から系統的に内容構成で扱うことが可能になった。

一方、平成10年の指導要領の改訂時に小学校指導要領から削除された「会食」は、新中学校指導要領技術・家庭と新小学校指導要領家庭の双方にその内容はみられない。「会食」と

は、2008年に発行された広辞苑第6版によると「集まって食事をする」とされ、「集まる」とは、2012年に発行された第14版の基礎日本語辞典には「散在していた同類の事柄がある目的や原因から一定のところに寄ってくる行為・作用」とされている。つまり「会食」は人が目的を持ち、集い食事をする事となるが、この「会食」は最新教科書からその学習内容が消失した。そのかわりに、新指導要領「B(1)イ楽しく食事をするための工夫」の事項を、「A(3)ア家族との触れ合いや団らんを楽しむための工夫」と「A(3)イ家族や近隣の人々とのかかわり」と関連づけて学習させるようにと同解説では説明されている¹³⁾。加えて同解説¹³⁾では、「(略) 食事などの場における会話は心の触れ合いが好ましい人間関係を育てる上で大切であることに気づき (略)」と述べて、会食を含めた食事の役割について内容強化をはかる必要性について触れている。

家庭科は、生活の中で多面的・多角的に問題点を把握し、数多くの解決方法の中から、自分と家庭の置かれている状況に対して適切な解決方法を考え、あるいは、問題解決的な手法により判断し解決を求める教科である。家庭科の学習は、家庭生活の物、人、事に関わる体験的な活動を実践することができるいわば特殊な教科ともいえる。人と触れ合いながら食事を作る・食べることのできる会食は、小学校及び中学校のいずれかの教育課程において必須ともいえる学習内容ではないかと考える。[B]のみならず、[A]や[C]の内容との連携をはかり、計画的発展的な学習が要求される学習内容であると考ええる。

以上、目次の移行から教科書内容の変遷についてその一部を考察したが、家庭科自体の年間時数は、平成元年の改訂時の5年70時間、6年70時間から、平成10年の改訂の5年60時間、6年55時間に削減されたままの状態が現在まで続いている。しかしながら、前述したように新旧両課程での指導事項の比較の結果からも、旧課程よりも新課程で学習内容が増加していることは明白である。この証拠は、同時に教科書のページ数が、旧教科書では24ページ、新教科書では25ページ、最新教科書では31ページと増加していることからみとれる。つまり、教育現場において一単位時間(45分)毎に綿密な指導計画に基づいた内容の濃い指導が求められているともいえる。

2. 教科書の用語分析による食物領域の学習内容比較

(1) 最新教科書の食物領域の索引の特徴

最新教科書の最後のページには、「家庭科教科書でよく使われる用語」として総数185語の用語が記されている。いわゆる索引である。以下索引と略記するが、この索引は最新教科書のみであり、新教科書や旧教科書には掲載されていない。

最新教科書索引の食物領域での用語は65語あり、それらを内容で六分類した結果(表3)、「調理用語」が最も多く抽出され34語(52.3%)、続いて「献立作り」10語(15.4%)、さらに「食生活と栄養」9語(13.8%)の順となった。多数を占める調理用語は、「～の仕方」や、基本的な操作の「ゆでる」「焼く」「いためる」などが載る。これらの用語は、教科目標

表3 最新教科書での「家庭科でよく使われる用語(索引)」の内容別分類

献立作り	食品名	調理方法	食生活と栄養	その他	食品の選択・保存
一汁三菜	お茶	あえる	栄養のバランス	かん境	消費期限
こんだて	ゆで卵、半熟卵	野菜をゆでる	エネルギー	防災	賞味期限
菜	乾物	いためる、焼く	五大栄養素	計 2	食物アレルギー
しる物、飲み物	日本茶	加熱する	脂質	計 3	
おかず	みそ	計量のしかた	消化		
つけ合わせ	みそしる	ご飯をたく	炭水化物		
伝統的な食事	わかめ	米ととぐ	タンパク質		
和食	計 7	はかる	ビタミン		
食事マナー		水にとる	無機質		
郷土料理		ひとつまみ	計 9		
計 10		ふつとう	グレイ部分は、「一口メモ」との共通用語を示す。		
		あく			
		かさ			
		クッキング			
		合			
		点火の仕方			
		火加減			
		ほのおの調節			
		湯のわかし方			
		用具のとりあつかい			
		きゅうす			
		だし			
		脱穀			
		地産地消			
		調理			
		調理用具			
		フライパン			
		包丁			
		実			
		みずみずしい			
		後かたづけ			
		エコクッキング			
		かん気			
		身じたく			
		計 34			

の「日常生活に必要な基礎的・基本的な知識(略)を身に付ける」、さらに新指導要領解説¹⁴⁾にある「調和のよい食事と調理に関する基本的・基礎的な知識及び技能を身に付ける」ための手段となるだけでなく、以下に示す同「3章5 言語活動の充実と家庭科」¹⁵⁾に寄与する。つまり「(略)ゆでるなどの生活に関連の深い様々な言葉が、児童自身の中で生きた言葉となるように配慮すること(略)」¹⁵⁾、「(略)生活の様々な事象を実感の伴う生きた言葉として理解することにより、人が生活を営むことのよさやその価値に触れ、生活への感性を高めていくことができるように(略)」¹⁵⁾と述べられている「言語活動の充実」の内容に該当する用語である。すなわち事象に関わる言語を生活の中で実感しながら把握し理解する児童の育成を目指すため、用語を厳選して作成されているページが索引であると推測する。調査に使用した小学校家庭科教科書と同一出版社の中学校家庭分野¹⁶⁾、高等学校家庭基礎¹⁷⁾の教科書には、索引がそれぞれ順に465語、414語設定されている。つまり単純計算では小学校教科書では、中学校及び高等学校教科書の索引用語数の約半分が使用されていることになる。

表4 最新教科書、新教科書の
一口メモにみる内容比較

一口メモ	
新教科書	最新教科書
	クッキング
沸騰	沸騰
	きゅうす
エコクッキング	エコクッキング
かさ	かさ
ソース、ドレッシング	かたゆで卵・半熟卵
味付け「さしすせそ」	水にとる
三色のグループ	あく
	地産地消
	みずみずしい
	あえる
	脱穀
	ご飯をたく
	(1)合
米をとぐ	米をとぐ
実・具	実・具
みそしる	わかめ
早起きは三文の徳	早起きは三文の徳
	フライパン
	ひとつまみ
	和食
菜・主菜・副菜	菜・主菜・副菜
	いためる
	焼く
つけ合わせ	つけ合わせ
	乾物
手前みそ	計 26
ジャーマンポテト	
計 13	

グレイ部分は両教科書での共通用語を示す。

(2) 一口メモにみる食物領域の用語の比較

一口メモは、解釈が難しい、あるいは日常の生活であまり用いない用語を解説したコーナーで、教科書下の欄外に掲載されている。表4には最新教科書と新教科書における一口メモでの食物領域の用語を示した。新教科書の食物領域の用語は13語、最新教科書では倍の26語が掲載され、両教科書の共通用語は8語ある。この用語の中には日常使用されることが少なくなった「脱穀」「沸騰」「早起きは三文の徳」「水にとる」「あく」「あえる」「ひとつまみ」などの調理独特の言い回しの用語も多数ある。一口メモは、家庭での調理経験が少ない児童に用語を基本的な知識として学習させる試みの一つとして導入されたと推測する。

索引と同様に一口メモは、指導要領解説「3章5言語活動の充実と家庭科」¹⁵⁾にある「各内容の指導にあたっては、衣食住などの生活の中の様々な言葉を実感を伴って理解する学習活動(略)」に該当する。つまり、一口メモは、「生活に関連の深い様々な言葉が、児童自身の中で実態を伴った明確な概念として形つくれるようにする」¹⁵⁾ 目的を担った用語理解のコーナーに該当する。

3. 教科書別の主材料毎にみた調理実習題材名の比較

家庭科特有ともいえる実践的・体験的な学習活動である調理実習の題材名から学習内容の変遷をたどった(表5)。旧教科書には17種、新教科書には21種、最新教科書には26種の題材名が掲載されている。三種の教科書に共通掲載されているメニューは9種類あり、ごはん、ゆでたまご、スクランブルエッグ、三色野菜の油いため、ほうれん草をゆでる、だしの取り方、みそ汁、フレンチソース、せん茶が該当する。これら題材は、小学校家庭科での学習で必須である「伝統的日本食」の理解を促進ための「ご飯とみそ汁やだしの取り方、切ったり、ゆでたり、いためたりする加熱操作」に該当し、すべてが指導要領の文言に即した題材である¹⁸⁾。

題材掲載数は、最新教科書が最多の26件あり、教科書の発行年が新しいほどその数は増加傾向が見られる。主材料別に分類した結果、特に増加の主材料は、卵とじゃがいも、野菜である。新指導要領解説には、「調理の基礎的事項を学ぶ上で適切な食品として、米、野菜、いも類、卵などが考えられる」¹⁸⁾と明示され、同時に「児童の扱いやすさや地域の特産、季節、

表5 各種教科書における調理実習題材名の分類

主材料	題材名	旧教科書	新教科書	最新教科書
ごはん	ごはん	○	○	○
	おにぎり	チャレンジ	○	チャレンジ
	おにぎり弁当		チャレンジ	
	いろどり弁当			チャレンジ
たまご	ゆでたまご	○	○	○
	目玉焼き			○
	スクランブルエッグ	○	○	○
じゃがいも	粉ふきいも		○	○
	ポテトサラダ	○		
	ジャーマンポテト	参考		○
	ツナポテトサラダ		○	参考
野菜	青菜のあえもの			○
	ゆで野菜サラダ			○
	ミニトマト入り野菜サラダ	○		○
	三色野菜の油いため	○	○	○
	野菜のベーコン巻き焼き	○	○	
	野菜の煮物	発展	発展	発展
	三色野菜入り焼きそば弁当		○	
	ねぎの酢味噌あえ			○
ほうれん草をゆでる	○	○	○	
その他	オープンサンド	チャレンジ	チャレンジ	チャレンジ (ゆで卵サンド)
	冷やし中華	チャレンジ		
	焼きそば			チャレンジ
	そうめん			チャレンジ
	だしの取り方	○	○	○
	みそ汁	○	○	○
	フレンチソース	○	○	○
	和風ソース		○	○
	中華風ソース		○	○
	オーロラソース		○	○
	白玉団子		○	
お茶	せん茶	○	○	○
	合計(チャレンジ)	17(3)	21(2)	26(5)

グレー部分は、三種教科書での共通題材を示す。

成長期にある児童の栄養を考慮して選択するようにする」¹⁸⁾とも記述されている。つまり、教科書に掲載できる野菜類、いも類、卵料理の題材は、ある程度児童の発達段階を考慮しながら地域及び学校毎のオリジナリティーを出すことが可能ともいえる。

続いての最新教科書の特徴は、チャレンジコーナーが従来より数多く設定されていることである。このコーナーの題材選択により家庭や学校の実情に沿った授業設計が可能となる。おにぎり、オープンサンド、焼きそば、そうめんなどがその内容であり、いずれも小学校の学習内容である「ゆでる」「いためる」が盛り込まれた手軽な題材である。つまりこれらは、児童が自立する手段として家庭生活で活用できる、あるいは活用しようとする意欲につながる¹⁸⁾、さらには人と触れ合いながら食事ができる機会を設定可能な題材である。

4. おわりに

平成20年に告示された指導要領に準拠した A 社発行の小学校家庭科教科書二種（2冊）（平成26年に検定され平成28年発行・印刷の教科書、及び、平成22年に検定され平成24年発行・印刷の教科書）と、平成10年に告示された指導要領に準拠した同じ A 社発行の教科書（平成16年に検定され平成17年発行・印刷の教科書）一種（1冊）の計三種（3冊）を調査資料として、食物領域の内容変遷を用語に着目し調査した。

小学校家庭の内容構成が旧指導要領の8つから新指導要領では4つに減少したことに伴い、自ずから食物領域の指導項目も変化した。さらに旧指導要領では、領域をまたいで関連した学習内容で構成された単元設定が求められていた。しかし新指導要領では、領域をまたいだ学習内容構成を求める記述はなくなった。この指導要領の内容構成の変化に伴い新指導要領に準拠した新教科書及び最新教科書での目次内容も順次変化していった。すなわち、複数の領域の学習内容で構成された単元、つまり食物領域以外の学習内容（家族領域や被服領域）を含んだ単元が徐々に減少していった。一方で新規に加わった「五大栄養素」「楽しく食事をするための工夫」などの学習内容もあった。

さらに目次のみならず、索引、一口メモ、調理実習題材名が、指導要領の改訂に伴い徐々に教科書毎に用語数やその学習内容を変えて増加した。すなわち、最も厳選された用語で構成されている索引に相当する「家庭科でよく使われる用語」は、最新教科書に初めて設定された。これは新指導要領解説では「5. 言語活動の充実と家庭科」¹⁸⁾の事項に該当し、この内容に沿う取り組みの手段の一つとして最新教科書で新設されたコーナーである。さらにこの「言語活動の充実」に該当する教科書での取り組みは他にもみられ、一口メモと呼ばれる欄外に記された用語解説もその一つである。しかし、この一口メモは旧指導要領に準拠した旧教科書ではない。新教科書と最新教科書では、言語理解に寄与する仕組みを意識して設定したと推察する。

さらに用語以外での「言語活動の充実」の取り組みとして挙げられる例が、実践的・体験的な活動を言葉で考えたり、表現したり、チェックするコーナーを導入していることである。この実践的・体験的活動は、新旧指導要領に明記してある家庭科の特徴的活動である。これらの活動を推進する教科書の取り組みとして「学習のめあて」（旧教科書の未設定）「やってみよう」「話合おう」「考えよう」「調べよう」「できたかな」（旧教科書の未設定）「振り返ろう 生かそう」「安全」「環境」「参考」「発展」「防災」の各コーナーがある。これらは、児童の学習状態の把握、家庭科に関する資質や能力の育成や、個に応じた生きるための力の育成を意識し意図して構成・設定してある。そのうち、「防災」は最新教科書で新規に設定されたコーナーであり、災害時の炊き出し¹⁹⁾がその内容である。近年の社会状況や時代の要請に対応したコーナーともいえる。中学生への震災後の調査において、「缶詰などの限られた食材で調理する方法を学習しておきたかった」という結果¹⁹⁾が報告されている。小学校家庭科においても、ラップフィルムを使用しおにぎりを手を汚すことなく作ること

や、食器にラップフィルムを覆い洗浄操作を省く工夫なども〔防災〕の学習内容に導入し、より身近で、生活への充足度を高める学習内容とする必要性を感じる。

河村²⁰⁾は家庭科の特殊性として、何かができるようになること、見える形で成果が示されること、単にスキルの習得ではなく、科学的な視点や実際の生活上での運用を目指し体系的に学ぶことができることを挙げている。つまり家庭科は生活に役立つ教科と述べている。また岡²⁰⁾は、命が生まれ健やかに成長するためには家庭生活における衣食住の生活が基盤であることはいうまでもなく、そのための生活の自立をはかる教科が家庭科であるとも述べている。

2015年のベネッセが行った調査²¹⁾で家庭科は小学生の好きな教科のトップ（90.2%）を占めている。生活の自立をはかる手段として取り入れられている各種の実習ないし活動を行うことが楽しい。そこには食べられる学習活動もある。加えて生活にすぐに役に立つから、点数教科ではないので息抜きができるなど様々な理由が家庭科を好きな理由として考えられる。しかし家庭科好きの根底には、家庭科には多数の選択肢から自ら選択し自分で答えを探究して学習するという本来ある学びの本質が隠されていると考える。小学校家庭科の目標である「家庭生活をよりよくする」という学習内容を深化していく過程を通して、子どもたちが学びの本質に少しでも近づき、さらに学びの本質とは何かに気づくためにも、家庭科の一時間一時間の授業の取り組みと、それを補助する教科書の学習内容構成は非常に重要な役割を担うと考える。

引用文献

- 1) 中央教育審議会答申（1996）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm（2016/7/28ダウンロード）
- 2) 文部科学省（1999）小学校学習指導要領解説 家庭編，開隆堂，pp.7-9
- 3) 文部科学省（2009）小学校学習指導要領解説 家庭編，開隆堂，p.5
- 4) 中央教育審議会答申（2008）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216829_1424.html（2016/7/25ダウンロード）
- 5) 田部井恵美子（1979）家庭科教科書の変遷（第1報）小学校食物領域の場合，日本家庭科教育学会，23（1）：12-18
- 6) 今井美樹（2005）小学校家庭科教育における指導法の分析 食物分野を中心として，学苑・初等教育学科紀要，776：92-106
- 7) 河村美穂（2006）調理を学ぶことの意味についての一考察，埼玉大学紀要教育学部（教育科学），55（1）：31-45
- 8) 高木幸子（2013）小学校家庭科教科書の内容構成と実習題材の変遷，新潟大学教育学部紀要，5（2）：181-18
- 9) 内野紀子他34名（2015）小学校5・6 わたしたちの家庭科，開隆堂，113pp

- 10) 櫻井淳子他27名 (2012) 小学校5・6 わたしたちの家庭科, 開隆堂, 109pp
- 11) 櫻井純子他16名 (2004) 小学校5・6 わたしたちの家庭科, 開隆堂, 101pp
- 12) 前掲3) p.16
- 13) 前掲3) p.23
- 14) 前掲3) p.25
- 15) 前掲3) pp.61-62
- 16) 大竹美登利他73名 (2016) 技術・家庭 [家庭分野], 開隆堂, 266pp
- 17) 大竹美登利・鶴田敦子他60名 (2016) 家庭基礎 明日の生活を築く開隆堂, 195pp
- 18) 前掲3) pp.26-36
- 19) 赤塚朋子 (2014) これからの家庭科教育6 家庭科の可能性, 日本家政学会, 65 (6) :
323-328
- 20) 日本家庭科教育学会編 (2013) 生きる力をそなえた子どもたち, 学文社, pp.44-51
- 21) ベネッセ教育研究所 (2015) 第5回学習基本調査報告書, 第1章学校での学習 http://berd.benesse.jp/up_images/research/1_chp1.pdf (2016/7/30ダウンロード)